

『保育園の活動をヒントにした自然体験の工夫 ～小さなところでコツコツと IP』

小川 結希（自然教育研究センター）

キーワード：幼児、自然体験、導入、フッキング

1. 工夫するようになったきっかけ

私は、これまで幼児対象のプログラムを実践してはいたが、自分の子育てと一昨年から配属された拠点での活動をきっかけに、改めて幼児を対象とした活動を見直すこととなった。

幼児のプログラムで大事にしたいのは、導入時のフッキングだと考えている。プログラム内容にもよるが、幼児対象の場合、非構成的な時間が主となる傾向にある。それは、子ども達はそれぞれが発見したり興味を持ったりし、それを側にいる大人が受け止めることを大切にするからである。

非構成の時間を楽しむためには、できるだけ緊張を排除し、自分の意志で見つける気持ちになっていることが望ましい。そのフッキングとしては、普段楽しんでやっていることに絡めた方が効果的なのではないかと考えた。そこで、娘の通う保育園の先生方にご協力いただき、そのアイデアをいただくことになった。



写真1 シール貼りの様子

2. 保育園からの情報を元にした実践

工夫したフッキングの実践の場は、「さいたま緑の森博物館」で行っている『里山ようちえん』という幼児と親対象のイベントである。クラスが2～3歳と4～5歳に分かれている。

<2～3歳対象>

その頃ちょうど2歳だった娘が保育園から持ち帰ったクラフト作品に貼る系が多かったので、その理由を先生に聞いたところ、手先の器用さ的にちょうど良く、子ども達も作業を楽しんでやるそう。デザインにも個性が出ている。そこで、イベントでは、簡単にできるシール貼りを参考にした。

準備物としては、これから歩く里山の景観に近いイラストと、緑の森博物館で見られる生きもののシール、そして赤や緑などの色シールである。特に説明はせず、自由に貼ってもらおうと、どんな生きものがどこにいて、里山にはどのような色があるかをイメージして貼っていく子もいれば、アートの子もいた。子どもたちがそこに貼った思いを聞いたり、シールの生きものや色について子どもの知っている話を聞いたりとやりとりのきっかけにもなった。

<4～5歳対象>

4～5歳については子育て経験のない世代なので、保育園のお迎え時に4～5歳担当の先生に「どんな活動をしていて、子どもに人気があるものは何か？」と質問をしてみたところ、先生数人が協力してくれ、遊びやクラフトなどについて話をすることができた。私の中で参考にしたのが色を楽しむカメラである。子ども達1人1人に渡し、散策したとのこと。プログラム内容に合わせてどういう利用ができるか考えた結果、次のようなカメラが出来上がった。名付けて「いろいろメガネ」である。



写真2 先生が作成したカメラ



写真3 自作のカメラ

子どもが首から下げ、覗くレンズの周りにいくつかの色がある。そして、そこには透明フィルムを入れられるポケットもついている。使い方は、覗くレンズの周りにある色と同じ色の自然物を見つけたら、「パチッ」とシャッターを切る→それ

をお父さんお母さんに共有する。色さがしの練習後は、各々で色を見つけ出し、あちこちでシャッター音が聴こえてきた。色を探すのも親子で楽しそうにしていたが、そこにシャッターを切るという行為が入ったことで、見つけたものにじっくり向き合う姿が見られた。目的地までの道中、写真を使い続けた子が多く、それをきっかけに親子の会話も弾んでいるようであった。そして、このカメラにはもう1つの使い方がある。帰り道に、行きにシャッターを押したものを含め、自分が気に入ったものを透明フィルムに入れて、「イベントの思い出写真」を作り、最後にまとめとしてカメラ越しに思い出の1枚を見せ合った。



写真4 「いろいろカメラ」を使っている様子

4. 今後に向けて

今回、これまでと違うアプローチ方法で導入部を工夫したことで、自分の成長を感じることができた。少人数の対応で、大きな成果のでもものではないが、いろいろ工夫すればそれに見合った効果が出ると再認識することができた。

また、今回を機に、保育園の先生と「情報交換」という関係を築くことができた。今後は、自分のプログラムを豊かにするだけでなく、先生が活用できそうなアイデアを少しずつ提供していきたい。こういう関り方も、大事なインタープリテーションであると感じた。

大きな波は起こせない私だが、自分にできることを大切に、コツコツと積み重ねていきたいと改めて思う機会となった。



写真5 自然物を透明フィルムに入れて、お気に入りの1枚をパシャ！

今回実施してみて、「効果的である」と断定できるほどの対象人数ではないが、参加していた幼児の多くにとって、本体へ向けてのよいステップとなっており、興味を刺激していたと言えるだろう。今後も同様に実施し、定番のアクティビティとしていきたい。